

7月14日 AM5:00 JR 穂高駅前に総勢11名が集合。貸切バスで中房温泉・燕岳登山口へ向かい、小1時間で到着。準備を整え AM6:30 登山口を出発する。天候は小雨。登山道は、赤や黄色の雨具を着込んだ登山者で渋滞気味だ。林の中の蒸し暑い急坂を、第一ベンチ、第二ベンチと休憩をしながら登る。3時間程で合戦小屋に到着。



林の中の蒸し暑い急坂を登る



ゴゼンタチバナ



イワカガミ



花崗岩石の登山道を登る

合戦小屋で小休止後、低木帯を抜け、視界の効かない霧雨の中、尾根道に登り出る。花崗岩石の登山道を登り、シナノキンバイが咲く山腹を巻くと、AM10:45 主稜線に建つ燕山荘に到着する。晴れていれば、西南の空の下、天を衝く槍ヶ岳が颯爽と聳え立っているのが展望できるのだが、今日は望むことが出来ない。腹ごしらえをして、荷を置いて早速に山頂へ向う。強風の中 AM11:20 燕岳山頂 2763m に全員見事登頂。10分程留った後、すぐさま引返し先を急ぐ事とする。



強風に霧が飛ばされ燕岳が姿を現す 霧中、白砂礫を踏んで山頂を目指す AM11:20 山頂に見事登頂

PM12:00 燕山荘を出発。低く垂れ込める雨雲の下、緑のハイマツと花崗岩石が林立する稜線を進む。白砂礫の斜面には、薄紅色のコマクサが今を盛りと群落している。視界が多少広がり、眼下に安曇平が微かに望まれ、大天井岳が霧雲に見え隠れしている。PM3:00 喜作レリーフ地点を通過、大天井岳への分岐を左に見て、ガレた岩場をトラバースして降下すると、PM4:30 大天井ヒュッテに到着、泊す。



大天井岳が霧雲に見え隠れしている



コマクサ



シナノキンバイ



ガレた岩場をトラバースする

7月15日、雨。AM6:30 大天井ヒュッテを出発。振り返る後方に大天井岳 2922mが、雨雲に見え隠れしている。歩く稜線には、ハクサンイチゲ、シナノキンバイの花々が群落してみずみずしく咲き競

う。登る前面は霧が覆い、時折強い雨が吹きつけ、視界が効かない。AM8:45 西岳ヒュッテに到着。ここで小休止して、このコース最大の難所に備える。



シナノキンバイの群落



タカネヤハズハハコ



視界の効かない稜線を行く

西岳ヒュッテから、急斜面を慎重に下降し、最低鞍部の水俣乗越に1時間程で到着。ここは上高地下山への分基点でもある。参加者の2名が仕事の都合等で、槍沢大曲り経由で、上高地へ下山する事となった。互いの無事を祈って別れた後、ここからは総勢9名で、東鎌尾根の痩せた岩尾根に取り付く。尾根にはハシゴ、クサリ整備がされ、それらを使用し、一步、一步高度をかせぐ。登る岩尾根の右側には高瀬川源流天上沢、左には雪渓を残す槍沢の溪流が、遙か眼下へ流れ下っている。



東鎌尾根の痩せ尾根に取り付く



長いハシゴを降下する



槍へ伸びる岩稜線を登攀する

PM12:10 岩稜に建つ大槍ヒュッテに到着、30分ほど休憩して昼食を摂る。ここから槍へ伸びる岩稜線の登攀を続け、ようやくPM1:45 槍ヶ岳山荘に到着する。しかし期待した美しい三角推形状の槍ヶ岳の姿を、ここからも全く仰ぐことが出来ない。にわかな天候回復も望めないと判断し、早速、山荘に荷を置いて、山頂目指して出発する。



山頂直下10mの鉄ハシゴを登る PM2:20 槍ヶ岳に登頂「バンザーイ！」



槍ヶ岳の岩場を下降する

槍穂先の高さ100mの岩場に取り付く。濡れた岩場にスタンスを確保し、ホールドを使い三点確保で、徐々に高度を上げていく。必死に登攀する絶壁の岩陰に、ミヤマダイコウソウ、ハクサンイチゲの花々が、風に揺られて咲いている。最後の10mの鉄ハシゴを、強風に身体が飛ばされないように登り切ると、PM2:20 とうとう憧れの槍ヶ岳山頂3180mに登頂する。「ヤッター!、おめでとう」。喜びの握手を交わし、お互いを称え合う。あいにく山頂は、展望が効かない白い世界。15分程留まった後、下山を始め、慎重に岩場を下降し、山荘に無事帰還、泊する。

7月16日あいにくの霧雨の朝、今日も槍ヶ岳の姿を拝む事が出来ない。AM6:30 後ろ髪を惹かれるように山荘を出発。何度も振り返るが、とうとう憧れの姿を望めず、AM9:40 槍沢ロッジに到着。ここからの下山路では、溪流沿いの淀みで、大きなイワナを1匹、また1匹と見つけ歓声を上げる。



7/14、霧が舞う強風の中、燕岳山頂を目指す。



7/16、前日に槍ヶ岳の登頂を果し、足取り軽く(?)濃霧の中、槍沢の雪渓を下る。

AM11:15 横尾に到着、昼食を摂る。昼食後、徳沢、明神を経て上高地に PM3:15 到着。2台のタクシーに相乗りし、PM5:00 過ぎ、松本で解散とした。

「悪天候の中、北アルプス表銀座を踏破し、最終目的の槍ヶ岳に登頂して無事帰還したことは、参加者の皆さんにとって、何にも変え難い貴重な経験となった事でしょう。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則